

科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 3 年 6 月 18 日現在

機関番号：34416

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2017～2020

課題番号：17K13467

研究課題名(和文) 地理的・歴史的変種の対照による行為指示表現の変化の研究

研究課題名(英文) Changes in imperative expressions: A comparison of dialectal variations

研究代表者

森 勇太 (MORI, Yuta)

関西大学・文学部・准教授

研究者番号：90709073

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,100,000円

研究成果の概要(和文)：本研究の目的は、行為指示表現の地理的・歴史的変種の調査を通して、各変種の表現法の差異がなぜ、どのようにして生まれてきたのかを明らかにすることである。この社会変化と待遇表現の変化の関連性を明らかにするため、方言研究と文献研究を組み合わせ研究を実施した。まず、方言研究においては、西日本諸方言における連用形命令のパリエーションの形成過程を明らかにし、各方言でそれぞれの地域にある言語形式とアクセント体系を元に連用形命令が形成されていく様子を明らかにした。また文献研究では、近世後期における行為指示表現を調査し、中央語の敬語をそれぞれの地域の体系に受け入れていく様相について研究を進めた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究によって、コミュニケーションにかかわる言語変化がどのように起こるか、ということの一端が示されたと考える。

近世後期における行為指示表現の調査から、話し手と聞き手との関係によって敬語を固定的に運用する江戸と、発話意図や談話の構造によって敬語を流動的に使用する上方という対比が明らかになったが、これは現代につながる地域差である。尾張は地方都市が標準的変種の影響を受けたときの運用変化の一つの事例を示している。連用形命令の地域差からは、各地の方言が、新しい形式を取り入れるときに、当地の言語の構造や語彙的資源に従って形を変える様相が確認でき、このことによって地域差が形成されると考えられる。

研究成果の概要(英文)：This study aims to examine how dialectal variations of honorific expressions developed over time and how societal changes affected changes in honorific expressions. I studied the system of imperatives in Western Japanese dialects, such as Kansai, Kochi, Hiroshima-Aki, Hiroshima-Bingo, and Yamaguchi. Each system of imperatives in these dialects is different. These variations developed due to differences in accents and changes in honorific forms, which are the sources of new imperatives. Furthermore, I studied the regional variations in the usage of imperative expressions and honorifics in four cities during the late Edo period: Kyo (Kyoto), Osaka, Owari (Nagoya), and Edo (Tokyo). In Kyo and Osaka, prostitutes in sharebon used imperative expressions with honorifics (and with non-honorifics to some degree), while in Edo, expressions with honorifics were used almost exclusively, with rare use of non-honorifics. The use of imperative expressions in Owari was similar to that in Edo.

研究分野：日本語学

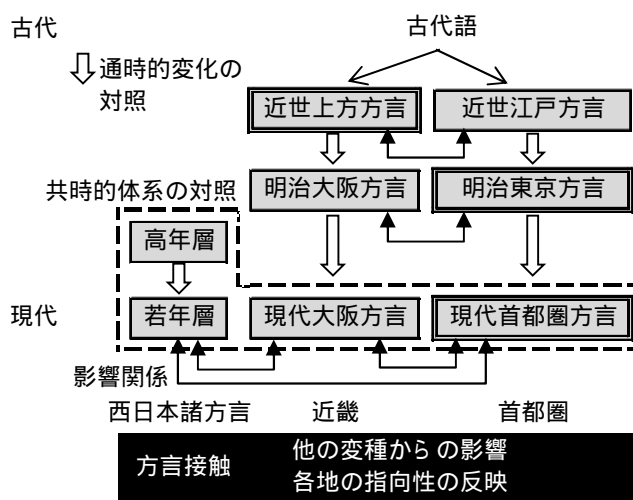
キーワード：行為指示表現 連用形命令 命令形式 敬語 待遇表現 歴史社会言語学

1. 研究開始当初の背景

代表者はこれまで、行為指示表現の地理的・歴史の変種を調査することで、各変種の表現法の差異がなぜ、どのようにして生まれてきたのかを明らかにすることを目的として研究を進めてきた。行為指示表現とは、命令・依頼など聞き手に行動を求める表現の総称である。これまでの行為指示表現研究では、単一の時代・単一の地域という共時態の記述・調査が中心だった。そのため、枠組みがそれぞれの記述によって異なり、それぞれの変種の持つ特徴は地理的・歴史的な対照が可能なものではないという問題点があった。

また、代表者は発話行為・言語行動から日本語文法史を明らかにするという手法をこれまで継続的にとってきており、行為指示表現の東西差についての研究を進めてきていた。しかし、単に東西差だけでなく、さまざまな地域の特徴を理解したうえで、行為指示表現の変化と社会変化の関連性を追求していくことが必要である。行為指示表現に関しては全体的な調査がなく、対照可能な枠組みでの調査が求められている。

これらの変化を考察する上で重要な視点は、江戸・東京方言と上方・大阪方言、およびその周辺の諸方言は常に影響を与え合ってきたという方言接触の観点である。社会のありようが言語の運用に大きく関わる待遇表現、およびその一部をなす行為指示表現の記述には、さまざまな位置づけにある諸変種の変化を共通の枠組みで記述し、対照させ、その体系と変化を相対化・類型化する必要がある。本研究によって、行為指示表現を調査の共通項として、社会変化による各方言の変化の共通性と、個別方言の独自性を考えることを目的とし、調査を立案した。



2. 研究の目的

本研究の目的は、行為指示表現の地理的・歴史の変種の調査を通して、各変種の表現法の差異がなぜ、どのようにして生まれてきたのかを明らかにすることである。この社会変化と待遇表現の変化の関連性は、どの時代でも起こりうるが、これらを観察するためには、方言研究と文献研究を効果的に組み合わせることが重要である。本研究期間においては、以下の点を中心的な研究課題とした。

[1] 方言研究 西日本諸方言における連用形命令のバリエーションの形成

[2] 文献研究 行為指示表現新形式の受け入れと回避についての記述

この調査により、各方言が方言接触を通して他の変種から受ける影響、および、各地の言語体系・指向性が反映されていく過程を明らかにする。

3. 研究の方法

[1] 方言研究：西日本諸方言における連用形命令のバリエーションの形成

西日本諸方言では、近年、連用形の外形をした命令表現（連用形命令）が各地で使用されるようになってきている。この形式は、近世期上方の文献には例があり、近畿から西日本諸方言に広まっている形式と考えられる。これらの形式が使用されている地点の中で、以下の地点を主要な研究地点とした。

関西（大阪方言）、高知方言、広島県安芸方言（広島市、東広島市等）、広島県備後方言（福山市等）、山口方言

これらの地点で、面接調査によって、当地の行為指示表現体系を記述した。

[2] 文献研究：近世・明治期における江戸・東京と上方・大阪方言の差異の記述

研究計画策定時には、近世後期から明治期にかけての江戸・東京と上方・関西の行為指示表現を調査し、運用の東西差について記述することとしていたが、研究期間中に尾張方言についても調査できる目途がたったため、本研究期間では、京、大坂、尾張、江戸の4地点で刊行された近世後期洒落本の行為指示表現を比較するという研究を主に進めた。この4地点の行為指示表現形式を記述し、それぞれの地域の運用のあり方について考察した。

4. 研究成果

本研究では、以下のことを明らかにした。

[1] 方言研究：西日本諸方言における連用形命令のバリエーションの形成

方言研究に関する研究成果としては、以下のものが挙げられる。

森勇太(2020)「広島県安芸方言の命令形式 大阪方言との対照」『国文学』104, pp.516-501, 関西大学国文学会

森勇太(2020)「西日本方言における連用形命令 地域差と成立過程」日本方言研究会(編)『方言の研究』6, pp.35-58, ひつじ書房

方言研究においては、西日本諸方言の行為指示表現形式について、行為指示表現全体の体系性、およびアクセントや、助詞との承接に着目して記述したところ、特に対照に関わるのところでは、以下のようなパターンが見られた(高年層の体系のみ記載)。

表 西日本諸方言の連用形命令のアクセント

	関西方言の語例 (書く)	関西	高知	広島 安芸	広島 備後	山口
無核・助詞なし	カ[キ]			×		×
無核・助詞あり	カキ[ヤ]			×	×	×
有核・助詞なし	カ[キ]ー(関西では不適)	×	×	×	×	
有核・助詞あり	カ[キ]ーヤ		×			

このように 5 地点のパターンは、助詞との承接やアクセントを考慮に入れるとすべて異なることがわかる。当地の敬語体系や、連用形命令が新形式であることを勘案すると、各地点の行為指示表現は以下の通りに成立したと考えられる。

- (a) 関西方言 = まず、敬語「ヤル」との承接形式から無核の連用形命令が成立し、その後助詞イナとの承接により有核形式が成立した。
- (b) 高知方言 = 敬語「ヤル」との承接形式から無核の連用形命令が成立した。
- (c) 広島安芸方言 = 一段動詞の命令形命令が有核の連用形命令と同形だったことから(起きる>「オ[キ]ーヤ」)、五段動詞にも連用形命令が類推され有核形式が成立した。
- (d) 山口方言 = 一段動詞の命令形命令が有核の連用形命令と同形だったことから(起きる>「オ[キ]ーヤ」)、五段動詞にも連用形命令が類推され有核形式が成立した(ここまで広島安芸方言と共通)。その後、助詞なしの形式が成立した。
- (e) 広島備後方言 = 一段動詞の命令形命令が有核の連用形命令と同形だったことから(起きる>「オ[キ]ーヤ」)、五段動詞にも連用形命令が類推され有核形式が成立した(ここまで広島安芸方言と共通)。これと前後して、「オ[カキ]」などの敬語形式を起源として無核形式が成立した。

五段動詞で連用形命令が成立することは、関西方言の広い影響があった可能性は否定できないが、各方言で成立している形式は異なり、それぞれの方言の事情に従い独自に変化が進んだと考えられる。一段動詞・有核形式の連用形命令(「起きる」の「オ[キ]ーヤ」、広島安芸方言)は、命令形命令と同形であることも考え合わせると、連用形命令は、各方言の命令形式のアクセント体系に合った形で、言語内的に成立したと考えられる。この中で、アクセントの形式を変える過程(有核形式から無核形式が成立すること)は起こりにくいと考えられる。というのも、安芸方言では有核形式ができて無核形式は成立しておらず、備後方言では、有核形式と無核形式で助詞との承接のありようが異なることから、有核形式と無核形式の成立に直接の関係は考えにくい。少なくともこれらの方言では無核形式と有核形式は、それぞれ別の語彙的資源によって成立したと考えられ、同様のことは関西方言でも起こった可能性が高いと思われる。

また、広島備後方言と広島安芸方言・山口方言の連用形命令のありようが異なるが、これは、安芸方言が広島県方言の中心地ともいえるところで、独自の命令形式「～ンサイ」が強く用いられたのに対し、備後方言や山口方言は、瀬戸内諸方言や、周辺地域からの影響により、連用形命令も受け入れたと考えられる。このように行為指示表現の歴史的变化においては、当地の社会言語学的位置によって変化が抑制されたり、促進されたりすることがある、といえるが、その前提として、それぞれの方言の行為指示表現体系を正確に把握すべきことは言うまでもない。

なお、この表に挙げたもの以外も、愛媛県松山市方言、愛媛県宇和島市方言、徳島県徳島市方言、香川県坂出市方言を調査しており、基本的にはこれらの体系のどれかにあてはまり、西日本諸方言で見られるパターンはおおよそ典型的に把握できたのではないかという見通しを持っている。一方で、若年層を中心にした調査で、伝統的な体系からは変化が起きているのではないかと考えられるところもあり、発表までには至らなかった。今後調査を継続することで、これらの類型をより確実なものにしていきたいと考えている。

直接行為指示に関することではないが、方言研究については以下の論考も発表した。

森勇太(2019)「授与動詞「くれる」と敬語体系 甑島・北薩方言における運用から」窪
園晴夫・木部暢子・高木千恵(編)『鹿児島県甑島方言からみる文法の諸相』, pp.185-
203, くろしお出版

標準語には見られない「くれる」の遠心的用法が方言敬語のない地域, および方言の丁寧語が
ある地域において目上の人物にも見られることがあることを明らかにし, 「くれる」のありよう
が当該方言の敬語のありようと関連していることを述べた。

[2] 文献研究: 近世・明治期における江戸・東京と上方・大阪方言の差異の記述

文献研究に関する中心的な研究成果としては, 以下のものが挙げられる。

森勇太(2019)「近世後期江戸における遊里語の行為指示表現 滑稽本・人情本との対照を
通して」『国文学』103, pp.21-36, 関西大学国文学会

森勇太(2019)「近世後期洒落本に見る行為指示表現の地域差 京・大坂・尾張・江戸の対
照」『日本語の研究』15-2, pp.69-85, 日本語学会

本研究期間では, 京・大坂・尾張・江戸の行為指示表現の地域差について検討し, 洒落本に見
られる遊女から客への行為指示表現を対照するという手法をとった。これまでの研究では, 作品
に出てくるすべての形式を対象としており, そのぶん, 各方言の差異が見だしにくかったが,
各作品で遊女から客への行為指示が一定数出てくること, 遊女から客への行為指示は, 対人配慮
の意識がより強く言語に表れる場面であると考え, この場면을対照することにした。

現れた行為指示表現形式を, 敬語(「オ」以外)を用いた「敬語グループ」, 敬語「オ」を用い
た「オグループ」, 非敬語の形式である「非敬語」グループに分けて集計したところ, 非敬語グ
ループ・オグループの使用は京>大坂>尾張>江戸の順で多く, 敬語グループの使用率はその逆
順となっていた。

それぞれの運用のありようを詳しく調査したところ, 京, および少なくとも1780年代以降の
大坂では, 同じ聞き手に対して複数形式を使用する場合, 敬語グループの形式を使い続けること
は多くなく, 心的距離や発話意図による影響も受けながら, 敬語グループと他のグループを併用
することがあった。江戸では, 洒落本の遊女と客の関係において, 複数使用のときも敬語グ
ループの形式を使い続けていた。尾張では心的距離や発話意図によってオグループ・非敬語グ
ループと敬語グループが併用されることがあるものの, 全体的には敬語グループに偏っており, 江戸に
近い運用と考えられた。

近世後期は江戸語の標準語化が進む時期であり, もともと敬語を持っていなかった江戸では,
標準語として敬語使用が求められた際に, 待遇度の高い形式を使い続ける運用が必要になった
と考えられる。一方, もともと方言敬語があった京・大坂では, それぞれの地域のことばが地域
語になっていくこともあり, 聞き手との親しさなどにより, 待遇表現形式を柔軟に用いるという
特徴がある。尾張は, もともと地域語としての方言敬語は存在するが, 標準語としての敬語使用
も求められるようになったときに, 江戸と同様に標準語の敬語を使い続けるという運用が必要
とされたと考えられる。このように行為指示表現の運用と, 社会のありようが密接に関連して
いることがうかがえた。

そのほか, 行為指示表現形式の東西差に関する論考として, 以下のものがある。

森勇太(2018)「行為指示表現「～ておくれ」の歴史 役割語度の低い表現の形成」岡崎
友子・衣畑智秀・藤本真理子・森勇太(編)『パリエーションの中の日本語史』, pp.251-
268, くろしお出版

「～ておくれ」の歴史的な用法と方言の用法を確認し, 都心の周辺部で用いられていることが
共通するイメージの低い役割語という用法を担っている要因となっていることを述べた。

森勇太(2018)「近世・近代における授受補助動詞表現の運用と東西差 申し出表現を中心
に」小林隆(編)『コミュニケーションの方言学』第16章, pp.365-386, ひつじ書房
申し出表現で用いられる「～てあげる」の用法を確認し, 東西でどのような表現を志向するか
ということの地域差について述べた。

森勇太(2018)「国会会議録における質問終了場面の敬語」藤田保幸・山崎誠(編)『形式語
研究の現在』, pp.377-394, 和泉書院

国会会議録を用いて質問終了場面で用いられる敬語について調査し, 行為拘束場面で「～させ
ていただく」をはじめとした敬語形式が伸長していく年代・度合いについて述べた。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計3件（うち査読付論文 3件／うち国際共著 0件／うちオープンアクセス 3件）

1. 著者名 森 勇太	4. 巻 15
2. 論文標題 近世後期洒落本に見る行為指示表現の地域差	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 日本語の研究	6. 最初と最後の頁 69-85
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.20666/nihongonokenkyu.15.2_69	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 森 勇太	4. 巻 104
2. 論文標題 広島県安芸方言の命令形式 大阪方言との対照	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 国文学	6. 最初と最後の頁 516-501
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 森勇太	4. 巻 103
2. 論文標題 近世後期江戸における遊里語の行為指示表現 滑稽本・人情本との対照を通して	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 国文学	6. 最初と最後の頁 21-36
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計7件（うち招待講演 1件／うち国際学会 0件）

1. 発表者名 森 勇太
2. 発表標題 西日本方言における連用形命令 命令形式の対照と地域差の形成
3. 学会等名 日本方言研究会第109回研究発表会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 森 勇太
2. 発表標題 近世後期江戸語における丁寧語の運用
3. 学会等名 第368回日本近代語研究会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 森 勇太
2. 発表標題 発話行為から見た授受表現の歴史
3. 学会等名 第16回名古屋大学大学院人文学研究科言語学分野公開講演会（招待講演）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 森勇太
2. 発表標題 近世後期洒落本に見る行為指示表現の地域差 京・大坂・尾張・江戸の対照
3. 学会等名 日本語学会2018年度秋季大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 森勇太
2. 発表標題 西日本方言における連用形命令の地域差とその成立
3. 学会等名 2019年第1回 土曜ことばの会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 森勇太
2. 発表標題 行為指示表現「～ておくれ」の歴史
3. 学会等名 土曜ことばの会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 森勇太
2. 発表標題 近世後期洒落本に見る行為指示表現の東西差
3. 学会等名 第78回中部日本・日本語学研究会
4. 発表年 2017年

〔図書〕 計6件

1. 著者名 岡崎友子・衣畑智秀・藤本真理子・森勇太（編）	4. 発行年 2018年
2. 出版社 くろしお出版	5. 総ページ数 304
3. 書名 バリエーションの中の日本語史	

1. 著者名 小林隆（編）	4. 発行年 2018年
2. 出版社 ひつじ書房	5. 総ページ数 432
3. 書名 コミュニケーションの方言学	

1. 著者名 藤田保幸、山崎 誠	4. 発行年 2018年
2. 出版社 和泉書院	5. 総ページ数 608
3. 書名 形式語研究の現在	

1. 著者名 青木博史・小柳智一・吉田永弘（編）	4. 発行年 2018年
2. 出版社 ひつじ書房	5. 総ページ数 308
3. 書名 日本語文法史研究	

1. 著者名 窪園晴夫・木部暢子・高木千恵（編）	4. 発行年 2019年
2. 出版社 くろしお出版	5. 総ページ数 304
3. 書名 『鹿児島県甑島方言からみる文法の諸相』	

1. 著者名 日本方言研究会	4. 発行年 2020年
2. 出版社 ひつじ書房	5. 総ページ数 180
3. 書名 方言の研究	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------